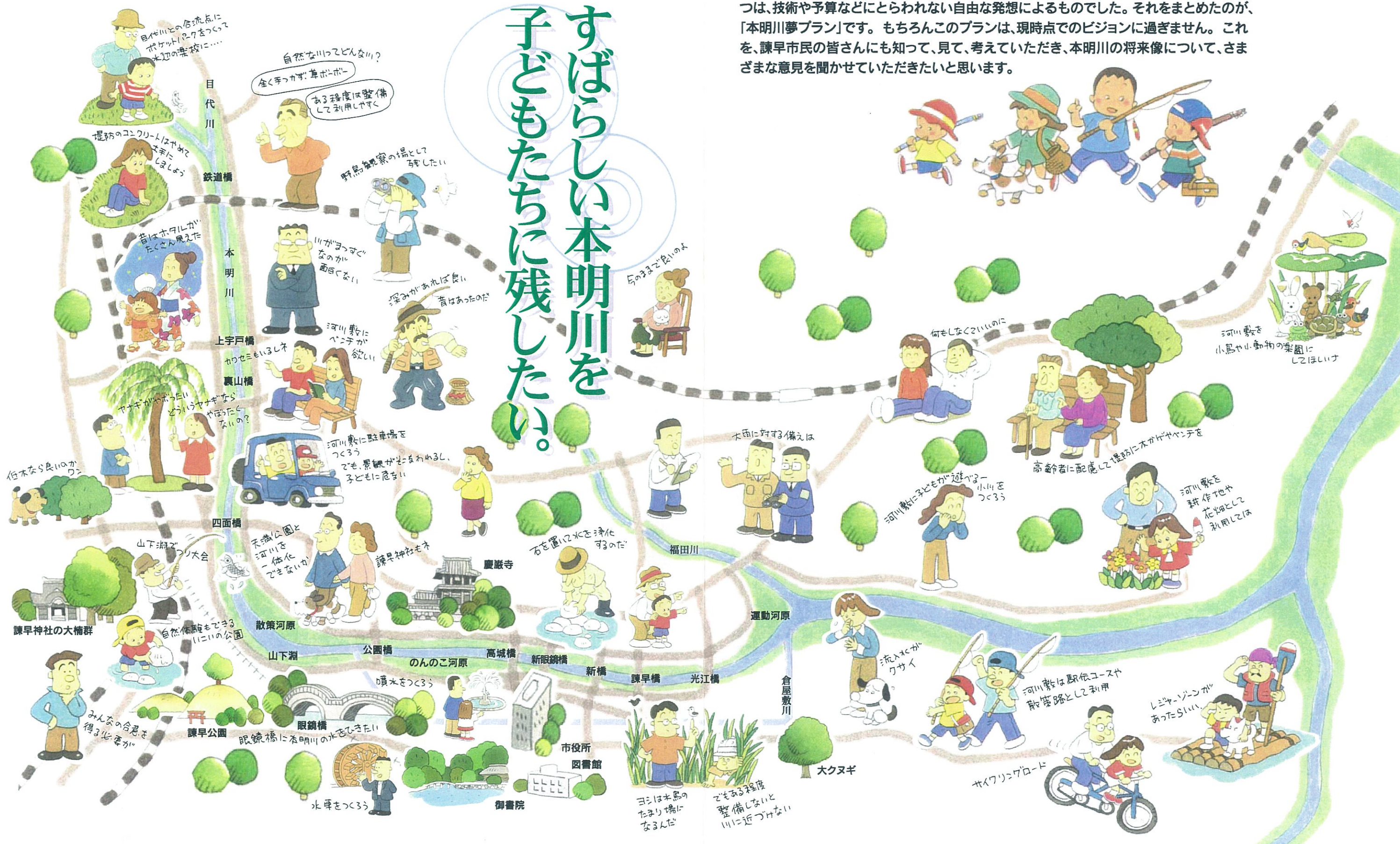


本明川夢プラン

本明川オピニオン懇談会が発足したのは、平成7年のこと。私たちが長年親しんできた本明川の美しさ、素晴らしさ、数々の思い出を子どもたちに残しておきたい。そうした願いからスタートしたものです。さまざまな角度から本明川について考えていくなか、オピニオンのメンバーから川の将来についてのいろいろな意見が出てきました。その一つひとつは、技術や予算などにとらわれない自由な発想によるものでした。それをまとめたのが、「本明川夢プラン」です。もちろんこのプランは、現時点でのビジョンに過ぎません。これを、諫早市民の皆さんにも知って、見て、考えていただき、本明川の将来像について、さまざまな意見を聞かせていただきたいと思います。

すばらしい本明川を
子どもたちに残したい。

子どもたちに残したい。



本明川オピニオン懇談会、発足。 “母なる川”の未来づくりがスタートした。

諫早市民にとって“母なる川”ともいうべき本明川。その素晴らしさを後世に伝えながら、より親しみやすい川にしていこうという思いが、この活動の原点である。

これをテーマに、平成7年、当時の河川環境保全モニターを中心とする11名で本明川オピニオン懇談会が発足しました（その後、公募によって7名が加わり、その後も増員があつて現在20名程度）。本明川オピニオン懇談会では、まず、メンバー個々の本明川への想いを語り合い、実際に川を視察。さらに、建設省（現国土交通省）の担当者や有識者などを招いて、本明川の歴史、治水、「多自然型川づくり」とよばれる自然を考慮した河川整備のあり方などについて理解を深めてきました。その後、平成9年に河川法が一部改正され、これまでの治水・利水に加えて、新たに「河川環境の整備と保全」という課題が盛り込まれました。この動きは、河川整備計画に地域住民の意見を反映させていくことの必要性をクローズアップ。本明川オピニオン懇談会もこれに呼応して討議を重ね、本明川の将来像についてさまざまな意見や夢を吸い上げたうえで、「本明川夢プラン」としてまとめあげたのです。



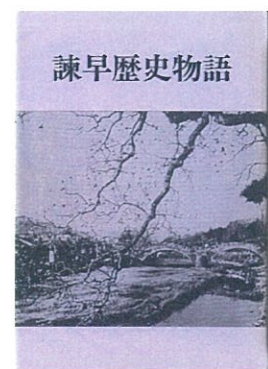
第10回オピニオン懇談会（平成10年8月）



多自然型川づくり実施箇所の現場視察（平成10年3月）

いまを知ることから、 未来が見えてくる。

未来を探るためには、まず“いま”を知らなければなりません。そこで、本明川オピニオン懇談会は、その活動の本明川の現状を把握することからスタートしました。平成10年10月には、諫早史談会の会長・山口八郎氏を招き、本明川の歴史についてレクチャーを受けました。また、同年11月の懇談会では上流から河口までをメンバーで視察。長崎大学の野口先生から水環境に関するお話を伺いました。こうした活動をとおり、本明川オピニオン懇談会のメンバーは本明川のいま置かれている状況について一つひとつ明らかにしていったのです。



諫早史談会三十周年を記念して発行された『諫早歴史物語』。諫早の水害のことから、歴史大渡野用水、山下淵の伝説、眼鏡橋、水車のことなど、本明川にまつわるさまざまな歴史が綴られています。山口八郎氏も執筆陣のひとりとして参加。



長崎大学の野口先生の講義では、水環境について、さまざまな角度から示唆に富んだお話を伺いました。

見えてきた未来像、 それは“多自然型川づくり”。

本明川の将来像を探るうちに、ひとつのキーワードが見えてきました。それが「多自然型川づくり」です。そこで、平成10年11月、我が国における多自然型川づくりの産みの親である福留脩文氏（西日本科学技術研究所代表取締役）を諫早市健康福祉センターに招いて講演会を開催。多自然型川づくりの概念と特長、その基礎となる石の組み方などについて伺いました。その後も、福留氏には何度か諫早に足を運んでいただき、さまざまな示唆をいただくなかで、ようやく本明川の未来像が見えてきたのです。



福留氏の現場視察（平成11年5月）



●福留脩文氏
（株）西日本科学技術研究所代表取締役。高知大学講師。国・県・市町村の開発・研究に携わってきた。自然環境を重視したスイスやドイツの国土開発と環境保全の調査研究を推進。いま全国各地で実施されている多自然型川づくりを、「近自然河川工法」として日本に紹介。

まざまざと見た水の猛威。 自然な水の流れの大切さを実感。

平成11年7月23日に起こった集中豪雨は、昭和32年の水害以来の大きな被害を諫早にもたらしました。本明川オピニオン懇談会でも現地を視察。水の脅威を改めて確認することになりました。「自然のままがいいことはいうまでもない。そのうえで、なお守るべきところは、守らなければならない」。メンバーの多くがそのように実感。さらに復旧にあたっては、福留氏の説のとおり、水制などを利用することによって、自然な水の流れを生かした川づくりを進めていく必要性を感じました。そして、これが、その後の「本明川夢プラン」策定にあたっての大きな指針ともなったのです。



八天町周辺の被害
本明川と福田川が合流するこのあたりでは、最大1メートルまで水位が上がった。
また、福田町土園川（どぞんこ）地区でも路面が0.7メートル冠水した。



災害後に行った現場視察。（上戸橋上流）出水の爪痕は生々しく、自然の猛威の前に、メンバーの誰もが言葉を失った。

地域とともに考え、 ともに新しい本明川をつくる情報誌。

本明川オピニオン懇談会の活動を地域に広く伝えていくとともに、地域の皆さんとともに本明川について考え、ともに本明川の将来を見つめていきたい。そんな願いからスタートしたのが、本誌『本明川だより』です。平成11年10月に創刊、以来3か月に1号のペースで発行してきました（発行部数3万7千部／諫早地域全世帯に配布）。これからも、本明川オピニオン懇談会と皆さんとのコミュニケーションの場として、届けていきたいと願っています。



オピニオン懇談会の活動

本明川オピニオン懇談会は、発足からこれまでにさまざまな活動を行ってきました。その活動をとおり、本明川について、あるいは環境について理解を深めていったのです。知れば知るほど、さまざまな意見が出されました。最初は言葉による意見が中心でしたが、やがて絵として描けるようにもなりました。懇談会はそれらを一つひとつ検討し、少しずつ集約。本明川夢プランとしてまとめあげたのです。

- H7.10 第1回懇談会 フリーターキング
- H8.2 アンケート調査（河川事業に対して）
- H10.4 第8回懇談会 多自然型川づくりについて
市報「いさはや」にて懇談会メンバー公募
- H10.6 第9回懇談会 公園堰上流の実施計画について
ミニコミ誌 ナイス（いさはや）にて懇談会メンバー再公募
- H10.8 アンケート調査（本明川への思い）
- H10.9 第11回懇談会 本明川への思いを各自発表
- H10.10 第12回懇談会 本明川の現状・治水・歴史について
諫早史談会 山口氏を迎えての勉強会
- H10.11 第13回懇談会 上流から河口まで現場視察
長崎大学 野口先生の講演
西日本科学技術研究所 福留氏の多自然型川づくり講演
- H10.12 第14回懇談会 改修状況説明 本明川ダム計画について
アンケート調査（区間別の意見）
- H11.3 第17回懇談会 本明川の治水・利水・環境について
福留氏による現場指導（多自然型川づくりについて）
- H11.4 第18回懇談会 これまでの意見を絵にしていこうことを決定
- H11.6 第20回懇談会 鉄道橋上流の将来の姿について
～第23回懇談会まで
- 7/23 大雨により出水
- H11.9 災害後の現場視察
- H11.10 広報紙「本明川だより」創刊号発行（特集：河原において、遊ぶ。）
第24回懇談会 永昌公園 天満公園 山下淵の将来の姿について～第27回懇談会まで
- H12.2 第28回懇談会 諫早公園～福田川の将来の姿について
～第30回懇談会まで
- H12.3 川づくり＆まちづくり講演会（福留氏）
- H12.4 広報紙「本明川だより」第2号発行（特集：川の歴史を、訪ねる。）
- H12.5 第31回懇談会 半造川合流～福田川合流の将来の姿について～第33回懇談会まで
- H12.6 広報紙「本明川だより」第3号発行（特集：川の災害に、備える。）
- H12.8 第34回懇談会 半造川合流～河口の将来の姿について～第36回懇談会まで
- H12.10 広報紙「本明川だより」第4号発行（特集：川を、考える。）
- H12.11 第37回懇談会 半造川の将来の姿について～第38回懇談会まで
- H13.1 第39回懇談会 上流～下流まで一連区間の確認
～第40回懇談会まで
広報紙「本明川だより」第5号発行（特集：子どもたちの本明川。）
- H13.4 広報紙「本明川だより」第6号発行（特集：本明川を釣る。）

本明川について知りたいこと・質問などがありましたら、お気軽にお問い合わせください。

〒854-0011
長崎県諫早市八天町20-15
国土交通省長崎工事事務所
諫早出張所
TEL. 0957-22-1356
FAX. 0957-22-1357

